岩波講座 日本文学史 第四巻 中世

方丈記と徒然草

永積安明

岩波書店

方丈記と徒然草

永積安明

目次

一　『方丈記』……三
二　『徒然草』……一七
参考文献……四二

一 『方丈記』

一

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたるためしなし。世の中にある、人と栖(すみか)と、またかくのごとし。

この有名な冒頭にはじまる『方丈記』の表情的な序章が、作品のモチーフをささえる無常観を、きわめて詠嘆的・情調的にうち出したものであることは、すでにいわれているとおりである。

しかし『方丈記』は、主題の単純な短篇であるからばかりでなく、のちにふれるように、作品として、すぐれて論理的な側面を持っているために、その文体も、また作品の構造も、明晰であって、ほとんど論証的な文章の形式をそなえている。

この詠嘆的といわれる無常観の構造と、論理的な作品構造とが、どのように交錯しながら、この作品をささえているか。ここに、方丈記論の基本的な問題点があろう。

また『方丈記』の文体が、漢文訓読体を主軸とし、対句的手法や倒置法・漸層法などの修辞的技巧の伝統を駆使していることも、これまで注目されてきた。しかし問題は、主題ときりはなされた個々の表現技術にではなく、まず、それをささえている作者の文学的主体にある。なぜなら、作者の創造主体が、そのモチーフをとおして構想をうみだし、さらにその構想に媒介されてはじめて、これらの伝統的な表現技術も、亜流としてうけとられるのでなく、更新

あるいは飛躍的な、新しい文体の確立として実現されうるからである。

二

ところで『方丈記』は、この序章でもって、ゆく河の流れと、その流れに浮かぶうたかたに象徴しながら、まず、人生とその生を託する住居とが、いかにはかないものであるかを説き、「その主と栖と無常を争ふさま、いはゞあさがほの露に異ならず。」つまり無常迅速、しばらくもとどまることがないと断言する。ここでは、多面的な現実のなかから、すべて生起の面がきりすてられ、消滅の過程にだけ視点があわされる。(1)

この一般的な命題を述べると、『方丈記』は、「予、ものの心を知れりしより、四十あまりの春秋をおくれるあひだに、世の不思議を見る事、やゝたび〳〵になりぬ。」として、ただちに自己の体験した安元三年(一一七七)の大火、治承四年(一一八〇)の辻風、同年六月の遷都事件、養和年代(一一八一―一一八二)の二年にわたる飢饉および大地震と、ひきつづいて、つぎつぎたたみかけるように、都を中心とする悲惨な自然的災害や社会的事件を展開してゆく。短篇『方丈記』のなかば近い部分が、これらの否定的事件を、ほとんど絶望的に追究することについやされている。そうして、これらの精細で克明な叙述のけっか、作者が到達したところは、「すべて世の中のありにくゝ、我が身と栖との、はかなく、あだなるさま、またかくのごとし。」という結語であった。

以上の構造は、きわめて明確であって、「ゆく河の流れ」や「あさがほの露」にたとえて語られた、さいしょの断言的な命題が、ここで再びくりかえされるのだが、そのあいだに、たびかさなる絶望的事件の精緻な絵巻をくりひろげ、しかも、それらを集中的に介在させることで、序章の一般的命題は、より具体的な強い印象にささえられたけっか、一段と深い重みをもった論証的な断言にまで高められるのである。序章から、この中間的な結語にいたるまで、作者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、人生における積極的・建設的側面をすべて捨象し、消極的・敗北的側面に、ほとんど単純なまでに集中する。

ここで『方丈記』は、純粋な自然や社会の、いわば外的な側面での否定的条件の追究という、前半の部分を終り、一転して後半の、「いはむや、所により、身の程にしたがひつゝ、心をなやます事は、あげて不可計。」とする、内的な精神の苦悩に、問題をしぼってゆく。しかも、この章のさいしょの部分は、巻頭序章のばあいと、おなじ展開の方法をとり、まず一般論としての地理的および身分的な差別によっておこる、生活上の苦悩をかぞえあげ、そのけっか、「いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。」という結論に到達する。『方丈記』は、このような内的・精神的な問題に立ちいっても、外的・自然的条件を語るばあいと同様に、すべてを、現世における否定的側面に集中してゆくという点では、一貫してかわるところがない。

ここで、精神の苦悩についての一般的命題は、前半の部分に見たところと、またおなじ手続きで、より具体的な、作者自らの問題に導入される。「わが身、父方の祖母の家をつたへて、久しくかの所に住む。」以下、作者個人の内面の世界が、おなじく個人的生活の展開にそって追究されてゆく。鴨長明（久寿二年―建保四年 一一五五―一二一六）は、早く父をうしない、父方の祖母の家からも離れ、やがて三十有余歳で独立の庵を結ぶが、それも以前の住居にくらべると、その十分の一ほどの狭さであり、地理的にも、たえず災害におびやかされる場所にある。つづいて長明は、かれにとって、生涯の転機となった下鴨河合社事件[2]をきっかけに出家し、六十代におよんで、方丈の庵を結ぶのであるが、『方丈記』は、そこにいたるまでの没落過程と、その運命の酷薄さとを、漸層的な進行を示す手法でもって叙述してゆくのである。

序章からはこばれた叙述のすじみちは、すべて、この方丈の庵を結ぶところにたぐりよせられる。この、車二輛に、住宅を含めてのすべてを積みこみうるような、そんな簡素な生活は、当時の貴族的世界にあっては、ほとんど極限的なものであっただろう。ここまで、わが身をおとしていった過程の叙述、つまり、さきに述べた一般的・自然的条件

からはじめて、一般的・内的世界におよび、さらにそのような条件のなかでの作者自身のおいたちから、方丈生活にいたるまでの尻すぼまりの宿命へと、具体的に、しかししだいに狭く、すべてを秩序だって、わが一身の問題に集中してゆく手法は、まったく明快な論証に特有な、論理的構造に、ささえられているとしなければなるまい。

『方丈記』の無常観は、詠嘆的・情調的といわれているけれども、その詠嘆が、在来の短歌的詠嘆と区別されなければならないのは、その背後に、ひとつびとつ計算された設計にもとづいて、煉瓦を積みかさねてゆくような、以上に見て来た叙述の構築法が、ひかえているからであって、それが『方丈記』の詠嘆の、強力なささえとなっているのである。だから、『方丈記』の表現の強さも、漢文訓読体や対句の強調といった、伝統的な手法の形式だけに解消されてはならず、むしろ逆に、この論理的な構想力にささえられることによって、これらの手法が、短歌的詠嘆から一歩ふみだしたというところから、評価されなければならない。

註

1　この点については、かつて「方丈記序論」(拙著『中世文学論』所収)で詳しくとりあげたから、くりかえさない。

2　長明が、早くから期待していた下鴨河合社の禰宜の地位を、同族の鴨祐兼一家に奪われたこの事件は、長明の心に強い衝撃をあたえ、これがかれの一生にとって、決定的な転機となった。長明の出家が、兼好のばあいとちがって、この事件に直接うながされた結果であることは、のちにあげる『源家長日記』・『十訓抄』等によっても、あきらかである。この事件の作品論的意義についても、「方丈記序論」にふれておいた。

三

ところで、ここまで追いつめられていった長明は、逆に、この「極限」をてことして、その苦悩にみちた世界から

脱出しようと試みる。

日野外山の方丈庵には、往生の因縁としての仏たちの絵像・経巻があるとともに、貴族世界を象徴する和歌・管絃の抄物や琴・琵琶が雑居する。そうして、「その所のさまをいはば、」以下に描かれる周辺の自然も、さいしょは、「春は藤波を見る。紫雲のごとくして、西方に匂ふ。夏は郭公を聞く。語らふごとに、死出の山路を契る。」からはじまって、すべて往生の因縁としてとらえられるが、やがて閑居生活の実態は、ほとんど修道生活からはずれてしまい、「若し、うらゝかなれば、峰によぢのぼりて、はるかにふるさとの空をのぞみ、」と、すでに捨てたはずの都の空をなつかしむばかりでなく、はるかに石間・石山に詣でて、蟬丸や猿丸大夫の墓どころを訪ねるような、そんな状態であることをあきらかにする。そのけっかは、「山中の景気、折につけて尽くる事なし。」である。あの悲惨をきわめた災害も、苦悩にみちた都の生活も、すでにここにはない。「身を知り、世を知れれば、願はず走らず。たゞしづかなるを望みとし、憂へ無きをたのしみとす。」という、消極的だが、平穏無事な生活を享受し、人を使わず、人にも使われず、対人関係にもわずらわされない、孤独な、しかし独立した、わが身のみを頼みとする隠遁生活が、「すべてかやうの楽しみ」として述べられる。しかも、そのさいごには、この楽しき「閑居の気味」のすばらしさが、「住まずして誰かさとらむ。」という自信をともなって、おしだされる。つまり『方丈記』の著者は、まず、この「極限」の生活に立ち、捨てるだけのものを捨てることで、逆にかえって、あくまで悲惨で、苦悩にみちみちた都の生活から脱却し、それらから遮断された場所での、むしろ、より純粋に本来の貴族的な風雅世界を享受できる、そういった楽しみの心境を述べているのである。だから『方丈記』のなかで、この章ほど、たのしげに書かれたところはなく、作者の本心は、この部分に、もっとも、のびのびと表現せられている。

ところが作者は、この「楽しき」閑居生活に安住することもできなかった。長明は、孤独な方丈生活のなかで、風

雅の「楽しみ」を享受できたばかりでなく、そのとざされた生活圏のために、おのずから消極的に修道生活をとげうる条件にさえ恵まれることを喜んだのであったが、やがて、そのような風雅に執着すること自体が、往生の障害となることを自覚する。俗塵から脱出した日野外山の閑居は、むしろ風雅をとおして、わかちがたく現世とつながっていたのである。そこで、「今、草庵を愛するも、とがとす。閑寂に著するも、さはりなるべし。」という反省が、かれの閑居生活に正面から対置される。こうして、閑居の「楽しみ」は、長明にとって、再び苦悩に逆転する。ついに、「しづかなる暁、このことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、」以下の強烈な内的葛藤が展開される。姿は出家でありながら、内心は濁世への執心をたちきれぬという自己矛盾がえぐりだされ、[1] それは避けてとおることのできない内心への深刻な問責となって、かれに解決を迫り、その心をつきさす。『方丈記』一篇は、このはげしい自己追究のけっか、「そのとき、心更に答ふる事なし。只、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。」と絶句するところにおわるのである。この沈黙は、もはや論理でこたえるのでなく、行動でもってこたえなければならないところでの、さいなまれるような沈黙であった。

いま、たどってきたような、『方丈記』の全叙述が、すべて妥協とごまかしのない、長明の実生活に直接かかわる事件ばかりに、そって展開せられていることが、ここで注目されてよい。それらはたしかに、多様で多面的な、中世初期といわれる変革期の現実から、その部分をきりとって、しかも作者の狭い個人的な経験の窓からとらえられた、一面的なものであった。しかし、『方丈記』に語られていることは、すべて長明六十年の生涯が、自らつきあたったものを、内心の世界に、じかにうけとめたものばかりであった。

長明の非妥協的な性格については、長明の友、家長のあらわした『源家長日記』が、あの下鴨社事件の後、やがて出家したかれの姿を描いて、

そののち出家して、大原におこなひすまし侍ると聞えしぞ、あまりけちえんなる心哉とおぼえしかど、……(中略)……其後、思ひかけず対面して侍りしに、それかとも見えぬ程にやせおとろへて、世をうらめしと思ひ侍らざらましかば、うき世のやみははるけず侍りなまし。これぞまことの朝恩にて侍るかなと申し、苔の袂もまことにしほれ侍りし。

と述べているのによっても、また、出家の原因を語るとともに、この事件の傷に固執した、その後の長明の行動をしるした『十訓抄』の記録(2)によっても、容易にうかがい知ることができる。しかし、かれの性格だけからは、『方丈記』の表現の集中性は実現されない。それはむしろ、基本的には、没落する貴族社会に一般的な世界観が、かの下鴨河合社事件において一挙に爆発的に意識化されたけっか、そこから触発された長明のモチーフの集中性に由来する。そこで、『方丈記』にとって、それほど強烈なモチーフとなった、長明の無常観の構造や質を、作品にそくしてあきらかにすることが必要になってくる。

註

1　この『方丈記』の結章の意義については、すでに西尾実氏のすぐれた考察「作品としての方丈記研究」(『日本文芸史における中世的なもの』所収)がある。ただ、そのうち、この最後の自問を、氏のように「社会的原因か個人的責任かという問題の提起」とするのは、やや近代的解釈にすぎよう。なぜなら、長明は文中いたるところに仏語を援用していて、ここの「貧賤の報」も、また「妄心」も、いずれも仏語であり、とくに前者は、古註以来解釈されているように、『因果経』の「為レ人貧賤者従二慳貪中一来云々。」に見られる内容で、もちいられているとすべきである。つまり、このばあい、前世の慳貪の業報として貧賤となったというところに主旨があって、長明は、社会的責任などを頭においていない。したがって、この部分の解釈は、自分が、このように、「すがたは聖人にて、心は濁りにしめり。」といわざるをえないような自己矛盾に陥った状態に居るのは、あるいは慳貪であった前世のむくいとして、貧賤がなやましているのであろうか、また念々分別のけっか、狂気してしまったのであ

ろうか、ととるべきで、『方丈記』一流の対句的表現で、その現状を強く問責するところに本意があろう。だから、問題としているのは、氏の説のような、「境遇にあるか、それとも自我にあるか」の原因追究ではなくて、やはり出家遁世しながら、なお閑寂を愛し、現世に執着するという自己の矛盾した生活、つまり長明にとって払拭しきれない、この根本的な矛盾に対しての解決を迫ることにある。これは、『方丈記』の主題や全構想からいっても、作品の焦点となっているのであるから。

2 「近比、賀茂社のうじ人にて、菊大夫長明といふものありけり。管絃の道、人にしられたりけり。社のつかさをのぞみけるが、かなはざりければ、よをうらみて出家して、（中略）ふかき怨みの心のやみに、しばしのまよひなりけんと、此の思ひをしるべにて、まことの道に入りにけるこそ（下略）」（『十訓抄』第九 可レ停二怨望一事）

四

『方丈記』の無常観が、すべて長明の経験した時代の、消極的・消滅過程に焦点をあわせ、積極的・生起の側面を捨象したところに構築されたものであることは、古代末期から中世初期にかけて一般的な、かつ常識的な観念形態としての無常観にとって、いま、とりたてていうこともないように見える。ところが、作品としての『方丈記』にとっては、この捨象が、一方では逆に、単純・明快な論理的追究と強烈な表現とを助けてもいるということは、すでに見てきたとおりである。しかし、この事実は、『方丈記』の構造を単純化し、そのけっかとしての明快な論証性を獲得もさせたが、けっして、『方丈記』の世界を豊かにするものではなかった。

『方丈記』を少し注意して読んでみると、この作品には、思いのほか数の明確が期せられていることに気づくであろう。このことは、『方丈記』の文学としての特徴である細目の真実性に深く関係するところであるが、[1] 当面の問題に限定していえば、巻末の識語[2]にいたるまで、作者の出会ったあらゆる事件が、ほとんど正確な日付けや年時によって、その時間を明確にしようと意図されていることが注目される。たとえば、前半に見られる災害事件の書きはじめが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「去ぬる安元三年四月廿八日かとよ。」「また治承四年卯月のころ。」「また治承四年水無月の比。」などというふうに、すべて明確な年代順に記されているし、後半の長明自身の経歴を語るばあいでも、「三十あまりにして、更にわが心と、一の庵をむすび、心を悩ます生活の「三十余年」をへ、「五十の春を迎へて」出家し、大原山に「また五かへりの春秋を」すごし、「ここに六十の露消えがたに及びて、」方丈の庵を結び、さらに「この所に住みはじめ」てより、「すでに五年を経たり。」というたぐいである。その他、現在と過去とを対比する例は、いたるところに見られ、作者がその体験した事件に対して、つねに空間的・数量的に正確を期しただけでなく、時間的契機にも、積極的な関心を示している例は、きわめて豊富である。ところで、これらの時間的契機は、どのように作品として具体化されたであろうか。たとえば序章において、人の住まいや「生まれ死ぬる人」が、昔と今とに対比されることはあっても、この過去と現在とが、統一的な連続において、とらえられることはない。だから、「生まれ死ぬる人」は、「何方より来たりて何方へか去る。」とされるように、歴史的な連続・必然性以外の、場所や方向つまり、空間的・平面的秩序においてしかとらえられない。そこで、この有名な序章は、人生を、その消滅過程においてとらえたということだけでなく、その構造の本質には、作者が、歴史的関連を疎外したところで、世界をとらえているという根本的な性格がある。したがって、災害事件の年代記的な正確性も、形式的には、事件を「歴史的」秩序においてとらえているように見えても、目標は別にあって、けっして、それぞれの事件のあいだに、歴史的な必然的関連を見たためではない。年代順に記録されている、これらの年代は、もちろん、継起した事件という時間的契機を担っているに相違ないけれども、その年代の順序には、とくべつ重要性がなく、必要なのは、ひきつづいておこったということであり、さらにこのばあい作者にとって、もっともだいじなのは、それらの複数の事件を積みかさねることである。つまり重畳として矢つぎばやにおこってきた惨事のかずかずでもって、「すべて世の中のありにくく、我が身と栖との、はかなくあだなるさま、また

かくのごとし。」という現世の苦悩と人生の無常とを証明することが、著者にとっての第一目標であったのだ。だから、この結論は、積みかさねられた実証によって、万鈞の重みを持つのである。これは、『方丈記』のはげしいモチーフにささえられた手法として、十分成功しているが、このばあい、そのような結果をうみだした必然性についての追究は、むしろ、きりすてられてしまうのである。

つまり『方丈記』が、生起や発展の面をきりすててしまったことは、その歴史意識の欠除にもとづくのであるが、もともと生起の面をとりだすことで、はじめて時間的契機も、その内容を充足され、そこに、発展の論理も生まれるのであるから、この歴史における主体的契機を捨象してしまえば、歴史発展の論理は、その半面しかとらえられない。『方丈記』の無常観は、このような歴史的意識を遮断したところで形成されている。だから『方丈記』の論理性といったのも、ひとつの論理的契機をとらえたということであって、真に歴史的・現実的な論理構造とは区別されなければならない。

註

1　たとえば、大地震のさいの余震を表現したところが、「或は四五度、二三度、若しは一日まぜ、二三日に一度など、おほかた、そのなごり三月ばかりや侍りけむ。」としるしたり、仁和寺の隆暁法印が、餓死者の人数を知ろうとしたさい、「四・五両月をかぞへたりければ、京のうち、一条よりは南、九条よりは北、京極よりは西、朱雀よりは東の、路のほとりなる頭、すべて四万二千三百余りなんありける。」としたりなど、いちいち正確を期して、精密に記録しようとした例が、いたるところに見られる。なお、『方丈記』が、このような精密かつ正確な記録を残しているということは、この作品の細目の真実性と直接関連するところであり、長明のきびしい自己省察は、同時にまた、その観察の精密性と不可分なものであった。かの自然的災害事件の描写は、結果としては、無常観の説明として、その詠嘆に集中せられるけれども、その部分自体のリアリスティックな描写は、また古代末期における貴族世界の崩潰状態を、まったく精密に写しだし、貴族社会の否定的・敗北的側面を、えぐりだしえた

ところであり、『方丈記』の中でも、もっともすぐれた部分のひとつである。この点では、『平家物語』のおなじ部分(巻一「内裏炎上」、巻三「颱」、巻五「新都」、巻一二「大地震」等の一部)の比ではない。しかし『平家』のこの部分は、おそらく『方丈記』を原拠としたものであろうとおもわれるにもかかわらず、細目よりは、事件としてとりあげられているため、『方丈記』の、あくまで対象に入りこんで描写する方法とちがった、つきはなした描出さえ見られ、精密ではないが、しかし、かえって叙事詩的作品にふさわしい、ダイナミックな動きにおいて造型せられていることが見おとされてはなるまい。

2 「于時建暦のふたとせ、やよひのつごもりころ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これをしるす。」ただし、この識語は、直接には『池亭記』の識語「天元五載、孟冬十月、家主保胤、自作自書。」あるいは、さらにその先駆としての前中書王の『池亭記』に、「己未之歳十二月二日記之。」とあるような、白楽天以来の記文体の伝統によるものであるが、それを和文にやわらげ、一層詳細に記していることは認められよう。

五

こうしたわけで、作者は、作品中のかれが、貴族的・都市的生活を捨てて、日野山中に逃げこんだように、上に見てきたような無常観のとりでのなかに、現実的・発展的な世界から逃亡する。そうして、全円的な社会的展望から自己を閉塞したところで、内心に向って、あくまで喰いさがってゆくのである。

前半に展開された、惨害の精密な絵巻の成功も、作者にとっては、そのこと自体に目的があるのではなくて、それらがリアルに描かれればそれだけ、より強く、またより具象的に、現世の無常を立証しうるという、ねらいがあったのだ。『方丈記』の後半は、これら実証の重みの上に、しだいに没落する作者半生の生活が、かさねあわされ、それらすべてが、作者個人の内心の苦悩に集中するように構想されている。つまり、『方丈記』の結章に見られる作者の自己反省、徹底した内心の追究は、これまで述べた『方丈記』の、最終的段階での、もっとも重い結論となっているので

ある。

作者はここで、いままで閑居生活の「楽しみ」を主張した自らに対して、まず「いかが要なき楽しみを述べて、あたら時をすぐさむ。」と反省し、さらに、「しづかなる暁、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひていはく、」と、持続的な思索をとげたけっか、その解答を自らの胸に迫るのである。その自己矛盾を無慈悲にえぐりだし、これを自己につきつけることができたのは、長明のモチーフが、その行動によってうらづけられた、妥協をゆるさないはげしいものであったからに相違ないが、この自己凝視への展開は、もはや巻頭の序章や、後半の閑居生活の嘆美に見られる、情調的・詠嘆的な表現から脱出し、より論理的な表現へ進んでいる。そこには、もはや詠嘆や情調的な態度からは出てこない、創造主体の客観化という理性的行為が見られる。つまりそれは、作者の思想的な主体の対象化であるとともに、そのことで、作品の主題が完結するのであるから、『方丈記』は、この結章にたどりつくことで、まさに思想的な文学として成立するのである。そのたどりつきの過程に、さきに述べた全構想の論理的構造があって、この結果を生みだすために力をそえたことも、この成果に関連して評価されなければなるまい。この文学的主体の対象化こそ、作品としての『方丈記』が、その記文としての形式を継承した、王朝時代の『池亭記』(1)から、決定的に一線を劃して飛躍を示しえた根拠であった。そうしたところからみれば、『方丈記』の本質的な先駆者は、むしろ王朝時代の女流たちの日記文学であった。彼女たちの内省的な追究の方法の実質をうけ、しかも、それらの先達たちが示した自己追究の主体を、より明確に対象化し、思想的な文学としての自らを、その結章においてうち立てた点で、『方丈記』には、これらの王朝文学との間にも、あきらかにひとつの飛躍的前進を見ることができよう。

しかし、このような前進が、隠者としての、とざされた世界でかちとられたことも無視してはなるまい。それは、すでに述べたような歴史的意識を欠除し、したがって、作者を、そのような世界に追いこんだ、内乱の客観的情勢に

対する視野を遮断し、閉塞した日野山の方丈の庵に、自らをおしこむことによって、かちとられている。だから、その点では、怒濤のように、作者の周辺を、また全日本を駆けめぐった、内乱の全貌を視野に入れたそのなかで、「盛者必衰」の道理を説き、すでに無常観そのものから脱出する歴史的契機をとらえ、かつダイナミックに表現しえた『平家物語』と同列に語ることはできない。

したがって、一瞬、論理的主体を確立したかに見えた『方丈記』の真の結末は、「只、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。」であり、いわゆる詠嘆的無常観の根元は、克服されないままに、その創造主体は、中世初期の隠者にふさわしいしかたで、後退せざるをえなかった。つまり、『方丈記』の構想に見られた強靭な追究も、ついに壁につきあたってしまう。その構想をはじめとして、その措辞にいたるまで、一方では、きわめて論理的な形式を駆使することのできた『方丈記』が、その序章と結末とに象徴されるように、それらの論理的契機のすべてを、かの歴史的意識を欠いた無常観の詠嘆のささえに、逆転させてしまったことは、ついにおおうべくもない。こうして、『方丈記』の作者は、やがて、その結語の方向へ、わが身を投げかけてゆくのである。

『方丈記』の高みを頂点として、鴨長明の晩年は、かの『長明発心集』となって展開される。そこには、かずかずの往生・発心談を、なお、わが生きかたにひきつけて、とらえようとする志向[2]はありながらも、その思想的創造の主体は、宗教的な世界に身をゆだねてしまい、もはや『方丈記』に見られた明快な論理的構想も、また精緻な細目の表現も、余韻として残存するにすぎない。『方丈記』において、うちたてられた創造主体を、さらに客観化し、そこでは、ついに克服できなかった詠嘆性を、もう一歩つきぬけ、長明によって形成された作品の論理的性格を、より高い段階で文学的に結実させるには、なお百年の歳月が必要であった。この事業をうけついだものこそ、やがて、もうひとつの内乱に当面してうまれた、兼好法師の『徒然草』であった。

註

1　慶滋保胤の『池亭記』が、『方丈記』の形式にとって、直接的な先達であったということは、これまで、しばしば述べられてきた。たしかに、『方丈記』の構想にも、文章の細目にも、『池亭記』の影響はいちじるしい。また『池亭記』にも、古代末期の貴族生活を批判し、その世界が崩潰しつつあることを描出したところがあって、『方丈記』の原型は、すでに、ここに生まれているといえそうである。しかし、両者は、これらの相似にもかかわらず、文学作品として、本質的に段階をことにしている。いま、ここで詳細を論じるばあいではないから、一言でもっていえば、『池亭記』の作者は、すでに批判的な側面を持ちながら、一方では、かの池亭の生活に自適し、適当に仕官し妻子を伴ない、その境涯に安住している。かれには、『方丈記』に見られる、深刻な自己省察がまったく欠けている。そうして、このことは同時に、『池亭記』が、貴族世界に対して、鋭い批判を貫きえなかった原因でもあったのだ。『方丈記』にとって、もっとも本質的な、この自己追究の精神は、だから、その形式上の先達『池亭記』から伝統することができなかったのであって、その点では、むしろ王朝女流日記文学の精神の正統をうけているというわけである。

2　『長明発心集』の序には、発心・往生談を集めた由来をしるして、「賢きを見ては、及び難くともこひねがふ縁とし、愚なるを見ては、自ら改むる媒とせむとなり。……人信ぜよとにもあらねば、必ずしも、たしかなる跡を尋ねず。道のほとりのあだ言の中に、我が一念の発心を楽しむばかりにやといへり。」と述べ、これらの説話を、あくまで、自己の発心・往生の機縁とするという態度が見られる。これは、『方丈記』以来の、わが身にひきつけての内省的精神が、『発心集』においても、なお持続していることを示しているのだが、しかし、その追究は、すでに往年のするどさ・はげしさをうしなって、かなり消極的なものとなっていたことも、あきらかである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com